



国連大学協力会

財団法人 国連大学協力会は国連大学の公式支援窓口です

# jf UNU News Letter

NO.7 2008年9月



jfUNU では、昨年4月にロザリン・ヒギンズ国際司法裁判所所長を招いて実施したシンポジウムの記録「国際社会における法の支配と市民生活」を発売しました。ご希望の方は、名前・住所を明記のうえ、e-mail(jf@hq.unu.edu)か、FAX(03-5467-1349)で。郵送料とも無料、先着20名まで。

## グローバルな問題を理論と実践から考察

### 特集 UNU International Courses

国連のシンクタンクである国連大学(UNU)には、通常の大学と違って恒常的な学生はいません。その代わりに世界各国の大学院生や学部卒業生等の若い人たちを対象として、大学院レベルの多様な人材育成プログラム(Capacity Development)を世界各地で展開しています。

『国連大学国際講座』(UNU International Courses: 略称IC)は、東京のUNU本部が2000年から実施している研修講座のひとつ。将来、国連機関やNGOを含めた各種の国際機関の職員を目指す人々や、国際問題に深い関心を持った学生等を対象として、「紛争」や「人権」、「開発」、「環境」等をテーマに、毎年地球規模の課題に焦点をあてた4つのコースを設定。それぞれ理論と実践の両面から見識を深め、実践的な能力を備えた人材の育成を目指しています。

◆ ◆  
第9回となる2008年度ICは、5月12日から6月20日まで東京・渋谷の国連大学本部で行われました。今年度開設されたのは、『新たなる地球規模の課題とガバナンス』『環境変化に対するリスク管理』『グローバル化と多国間システム』『国際貿易と開発』の4コース。世界37カ国から57名が参加し、国内外の学者・研究者をはじめ、大使館員や国連職員、政治家など30名あまりの多彩な顔ぶれの講師陣が授業を担当しました。

初日に開講式とウェルカムパーティーが催され、6週間にわたる研修がスタート。各コースとも1回90分の授業が週に3回(セッション)、6週間で合計18セッションが行われました(受講生は希望すれば2コースまで選択可能。各コースの授業は重複しないように時間割が編成されている)。カリキュラムは、UNU本部と世界各地にあるUNUの研究・研修センターで実施されるさまざまな研究プロジェクトに関連する内容を中心とし、高い学術レベルで進められました。



どの授業も事前に必読文献等の課題が与えられ、受講生には、単に出席するだけでなく、ディスカッションやディベートを通じて授業への積極的な参加が求められます。講師陣と直に議論し、毎週の授業が終わると、その週の講義内容やディスカッションに基づいてレポートを提出。また与えられたテーマからひとつを選択し、最終論文を完成させました。こうした受講生の研究活動を、UNU学術部門の研究者がコースコーディネーター、カウンセラーとしてサポートしました。

最終週の授業では、受講生は5~6名のグループに分かれ、それまでの学習成果を発表。各コースにおいて選ばれた1組ずつ合計4組が、最終日の"Student's Final Presentation"に臨み、関係者、ゲストも含めて100名あまりの聴衆を前に、研修成果を披露。その後、修了式でUNU学長のサイン入りの修了証を受け取り、2008年度ICは終了しました。

### UNUpedia

#### ICを受講するには

●**応募要領**／例年10月に翌年度の募集要領が公表される。受講希望者は、卒業大学の学業成績表、TOEFL得点表と推薦状(3名)が必要。提出書類は推薦状を含めてすべて英文。例年1月上旬が申込締切。書類は国連大学のウェブサイトからダウンロードできる。2008年度の競争率は約5倍だった。  
●**受講者選考**／IC選考委員会が主に次の基

準で決定する。▽学歴、職歴と受講希望コースとの関連性およびレベル▽応募者が希望するコースと将来目指す職業との関連性▽地球規模の諸問題に対する応募者の関心度▽分析能力▽大学の成績・専門領域における実績▽英語力●**受講料**／1コースが10万円(約1,000米ドル)、2コース同時に受講する場合は合計で15万円(約1,500米ド

ル)。●**奨学金**／途上国出身者で、財政援助が必要な受講生には全額給付または部分給付の奨学金が用意されている。2コースを受講している者の中から、学業成績と財政援助の必要性を基準として決定される。奨学生には、宿泊費、旅費、日々の経費が給付されるが、受講料は2コースとも自己負担となる。

「初めて日本に来て何より印象に残ったことは、ひとことといえば"質 (quality) の高さ"。

アフリカ南東部の国マラウイ共和国から今回参加したのがパトリック・ムサさん。国立マラウイ大学を2003年に卒業し学士号を取得。以後、母校でアシスタント講師として、Word、ExcelなどのコンピュータアプリケーションやIT関連の授業を担当しています。コンピュータが専門のムサさんですが、同時に国連の活動やグローバル 이슈にもこれまで大きな関心を寄せてきました。

「インターネットで"UN"に関する検索を行ったところ、United Nations University にヒットしました。それまでUNUの存在については何も知らなかったのですが、UNUが実施する国際講座 (International Courses) についてもその時、詳しく知ることとなったのです。」

UNUのウェブサイトに掲載されていた2008年度のコースガイドをダウンロードし、プログラムを熟読。充実した6週間の内容に、ぜひ日本に行って受講してみたいとの希望が湧いてきたそうです。

「私の専門はコンピュータやIT関連で、ICが今年度設定している4つのテーマは直接的には関係のないものでした。しかし、現代においてコンピュータは、どんな問題に取り組むにせよ、必ず必要とされるものです。世界的に事態が深刻化している環境問題についても、いろいろなシミュレーションを試みたり、解決のための意志決定を行うために、コンピュータの活用が欠かせません。私が選択したコースのひとつが『環境変化に対するリスク管理』なのですが、この講座を受講することによって、私の専門であるコンピュータ技術が環境問題の解決に貢献できる可能性を見出せるのではないかと考えました。」

「さらにコースガイドを読んでいるうちに、『グローバル化と多国間システム』にも大きく興味をそそられました。グローバル化の進展には目覚ましいものがありますが、その恩恵を大きく受けている国とそうでない国がある。グローバル化のプロセスにおける課題や国連の考え方を追究してみたいと思いました。」



「授業は、教授による講義と参加者によるディスカッションで構成されているのですが、教授の巧みなアプローチや誘導によって、熱のこもった議論が展開されています。さまざまな国籍、多様なバックグラウンドを持つ参加者がそれぞれの視点で意見を闘わせるので、とても参考になります。2つのコースを選択しているため、多くの参考資料を事前に読んでおかなければならず、授業準備には随分と時間を費やしています。毎週ショートエッセイも課されます。授業がない時は、UNUのリーディングルームやコンピュータールーム、図書館にこもって勉強しています。」

コースを問わず受講生全員に与えられている課題が、論文提出。ムサさんは、2つのコースそれぞれで論文を書き上げました。『環境変化に対するリスク管理』では、Kids ISO 14000のプログラムをどのようにマラウイでの教育現場、特に小学校・中学校において適用できるか考察を加えました。そのタイトルは"Environmental Management Education in Malawi: Exploring the Possibility of Kids ISO 14000 programme in Malawi" というものです。」

忙しい勉強の合間をぬって、用意された鎌倉観光やクルージング、朝霞基地、歌舞伎見学などオフタイムのプログラムもエンジョイ。

「ICで受講生に配布された授業関係の資料ひとつとっても、洗練したものを感じました。勤勉な日本人の、何事においても品質に妥協しない姿勢も目の当たりにしました。マラウイはまだ発展途上の国ですが、見習いたいと思うことが多くあります。」

「異なる国々の参加者と知り合えたことは何よりも幸せなことでした。今後も互いに連絡を取りUNU Alumniにもぜひ参加して、情報交換を続けていきたいと思っています。」

今回のIC受講の経験を生かしながら、母国で大学院進学を目指したいというのが、ムサさんの今後の希望です。

## UNUpedia

### ICのカリキュラム等

●**学習環境**／UNU本部内の図書館を自由に利用できるほか、期間中、受講生には専用のリーディングルームとコンピュータールームが自習場所として用意される。●**成績評価**／① Weekly reflections：毎週、その週の講義内容やディスカッションを元に500 wordsでショートエッセイを提出する。② Class performance：文献課題を授業までに読了したうえで、授業ではディスカッション、ディベートやグループワークへの積極的な参加が求められる。③ Attendance：授業へは特別の事情を除いてすべて出席することが求められる。欠席した場合、最終評

価が減じられる。④ Final Paper：上記に加え、受講生は2,500-3,000wordsで与えられたテーマから一つを選んで最終論文を提出する。以上を考慮して、受講生にA-Fの成績評価が与えられる。各要素の評価割合はコースによって異なる。●**ファイナルプレゼンテーション**／最終日には、各コースでそれぞれ選ばれたグループが、受講生、講師、招待者等臨席の中、研究成果を発表する"Final Presentation"が催される。●**修了証**／課題、授業への参加度や出席状況で所定の基準をクリアした受講生には、修了証が与えられる。●**2008年度受講生デー**

●**受講生数**：37カ国57名 ●**地域別割合**：アジア・太平洋22.4%、ヨーロッパ8.1%、北・南アメリカ21%、アフリカ15.3% ●**男女別**：女性19名、男性38名 ●**コース別受講生数**：「新たな地球規模の課題とガバナンス」25名、「環境変化に対するリスク管理」23名、「グローバル化と多国間システム」26名、「国際貿易と開発」24名、1コースのみの受講生-16名、2コース受講生-41名 ●**受講生の主な職業**-学生、大使館員、大学教員、国連職員、NGO職員、弁護士、研究所研究員など多士済々。

## インタビュー



「あ」という間の6週間でした。」  
 今年のICの3人の日本人参加者のうちのひとり、家喜志真（いえき・しま）さんは、最終日のファイナルプレゼンテーションでの発表を前に、jfUNUの取材に語ってくれました。

家喜さんは、今年3月に東北大学大学院を修了。東北大学では世界各国から多くの外国人留学生が学んでいますが、家喜さんが専攻していた大学院経済学研究科のゼミ（経営政策（大滝精一教授））でも、10人のゼミ生のうち7人が中国人留学生でした。

「彼らの圧倒的なハングリー精神や問題意識の高さに接しているうちに、外国の文化や国際交流に関心が湧き、課外活動としていろいろな国際交流プロジェクトやイベントを学内で企画するようになりました。」

「私はjfUNUの賛助会員なのですが、送られてくる資料を通じて国連大学のICについて知りました。大学院修了後は東京のITコンサルティングの企業（フューチャーアーキテクト（株））への就職が決まっていたのですが、会社の7月入社制度を利用して、ぜひ受講してみようと思ったのです。」

大学院時代、経営政策を研究テーマのひとつとしていた家喜さんは、今年のICの4つのコースのうち、「国際貿易と開発」の受講を希望。応募にあたっては、志望理由を自分の専攻やキャリアと関連づけながら英文で記述する必要があり、家喜さんにとって簡単な作業ではありませんでしたが、書き上げた後に友人の留学生のチェックも受けるなどして提出。見事選考を突破しました。

「外国留学の経験もないので英語のハンデを痛感しましたが、宿舎（※参加者たちは最初の5週間は東京・代々木の「国立オリンピック記念青少年総合センター」に宿泊）で他の参加者から、施設の利用方法や日常生活の質問や相談を受けたりしているうちに、彼らと親しくなることができ、英語も耳になじんできました。」

「初回にいきなり膨大な量の英文の資料や課題文献が

与えられ、授業までにそれらを読みこまなければなりません。さらに講義後、毎週テーマを決めてレポートを提出することが義務づけられています。最初のうちは授業の内容を十分に消化しきれないまま書いていたので、『単なる講義のレビューではなく、もっと焦点を絞って書くように』などのコメントが付いて返されたりしていました。」

「授業では、国際貿易における貿易ルールや知的財産権の問題など経済的な側面のみならず、法的な問題からのアプローチも多く勉強になりました。最終論文では人的資源の流通の問題を取り上げ、高等教育を受けた発展途上国の人々が、先進国で働くことが多い現状に疑問を投げ、そうした人々が故国で活躍・貢献できる機会や環境を創出することが重要であるという提言を具体的に行いました。」

IC参加者は、オフタイムには日本での生活をエンジョイすることにも意欲的で、授業のない週末に浅草や京都に観光に出かける人もいたとか。家喜さんもアフリカ料理を味わうグルメツアーを企画して、有志で出かけたそうです。

実は講座期間中にご親族の不幸があり、一時実家に戻っていた家喜さんですが、その間もプレゼンテーショングループの仲間が、メールや電話で様子を尋ねてきたり、授業の内容を報告してくれたりしたそうです。

「この講座を通じて得られた一番の財産は、ヒューマンネットワークです。仙台生まれで仙台育ちの私にとって、37にも及ぶ世界各国からの参加者、そしてそれぞれの多様な問題意識に触れられたことは、とても刺激的でした。良い仲間恵まれ、彼らと出会えたことが一番の成果でもあります。今後もずっと連絡を取り合っていきたいと思っています。ICは、学部生には少しハードルが高い内容かもしれませんが、目的意識の強い大学院生や企業に勤める社会人が再び学ぶ機会として、とても有意義な体験になると思います。」



## UNUpedia

## ICのオフタイム

●課外プログラム・イベント／鎌倉観光・朝霞基地見学・歌舞伎見学・横浜クルージング等。その他、各自、夜の渋谷や六本木に繰り出すこと多々？ ●ホームステイプログラム／期間中、希望する受講生は1泊2日の日程で日本人家庭にホームステイする。今年は5月16日（金）から18日（日）にかけて実施。ホームステイ期間中のプログラムは、各家庭に委ねられている。 ●受講生の感想から／「異なる人々、異なる体験、異なるバックグラウンドの人々と共にいられたことを誇りに思います。」「イベント、授業、講義、教授陣。すべてが素晴らしかった。まるで10年前から準備されていたように思えた。」「教授陣との交流が素晴らしかった。扉はいつもオープンで、どんなことでも質問でき、いつでも快よく応じてもらえた。」「日本人家庭でのホームステイは、このプログラムのひとつのハイライトでした。日本の家庭や豊かな文化を知ることができました。」「素晴らしい体験でした。寿司、納豆の味も含めて」「ここで出会った素晴らしい人たちと、ずっと交流を続けていきたい。」



jfUNUが企画した歌舞伎見学。観劇後、国立劇場の前で。



■ 東北大学との共催セミナー「人間の安全保障」

4月16日、東北大学片平キャンパスにおいて、『人間の安全保障—恐怖からの自由、欠乏からの自由—』をテーマに東北大学、国連大学、国連大学協力会主催のシンポジウムが開催された。セミナーでは、国連大学のヴェセリン・ポボヴスキー学術審議官、リャン・ロフウェイ学術研究官が「平和構築」、「環境」の視点から安全保障を論じ、続いて東北大学教授陣が医学、農学、工学などそれぞれの専門分野から、人間の安全保障に対する取り組みについて提言を行った。

■ フィンランド共和国元大統領が記念講演

5月26日、1994年から2000年までフィンランド大統領を務めたマルツィティ・アハティサーリ氏を招いて、第14回ウ・タント記念講演が行われた。アハティサーリ氏は、世界中の紛争において相対するグループ間の対話を押し進めることで、困難な紛争を解決へと導く役割を果たしてきた。「アフリカ、アジア、ヨーロッパにおける和平交渉」と題した講演でアハティサーリ氏は、「我々には、紛争を回避する責任があり、またそれが成功しなかった場合には、紛争を平和的に解決する責任がある。」と述べた。

■ ゼロエミッションフォーラム「地球温暖化と低炭素社会」

より持続可能な産業社会システムの実現を目指す国連大学「ゼロエミッションフォーラム」が、5月28日に第9回総会を開催した。記念講演会では「地球温暖化と低炭素社会」をテーマに、まずスバンテ・ブデーン スウェーデン環境省地球温暖化局局长が「温室効果ガス削減と経済成長を両立させるスウェーデンの温暖化政策」について紹介。続いて田村義雄環境省事務次官が「地球環境問題の現状と課題」について述べた。さらに「よい環境規制は地球を強くする」という「ポーター仮説」をテーマとして、パネルディスカッションが行われた。

■ 【TICAD(アフリカ開発会議)IV】関連イベントを開催

第4回TICAD(アフリカ開発会議)が、5月28日-30日に横浜で開催されたが、国連大学ではTICAD開催期間中、安全保障や環境の問題、持続可能な開発のための教育等、国連大学の研究者をはじめ各界から学者、有識者等を招いてアフリカ開発の問題に関連する各種イベントやシンポジウムを開催した。

『環境・気候変動問題への対処』の分科会では、オスターヴァルダー国連大学学長が会議のリーダーを務め、「対応力が脆弱なアフリカにとって、気候変動への取り組みは必須のものである。」と述べ、具体的な対処法についても言及した。そして「私たちはなすべきことを知っている。さあ取り組もうではないか」と呼びかけた。

■ 渋谷区と公開講座を開催

国連大学では、2003年より生涯学習の機会拡大を目的として、渋谷区と共催して公開講座を行っている。今年は、地球温暖化対策の課題や家電製品の環境配慮の具体的な取り組みなど「地球環境と持続可能な社会のための新たな取り組み」がテーマ。7月3日から毎週木曜日の午後7時~8時30分、4回にわたって開催され、渋谷区内在住、在勤、

在学の約100名が受講。世界が抱える深刻な課題と解決に向けた展望について、市民たちが自ら真剣に考える機会となった。

■ G8・途上国とのダイアログを開催

G8北海道洞爺湖サミットでは、5月に横浜で開催されたアフリカ開発会議の成果を評価しつつ、それらの前進を図りながら、2015年を目途としたミレニアム開発目標の達成にも積極的に取り組むことが確認された。このG8サミットに先駆け、国連大学では、7月1日に「アフリカの開発と地球規模の課題：G8への提言」と題して、国連ガバナンス・イノベーションセンター及びG8リサーチグループとともに、G8と開発途上国のダイアログを開催した。ダイアログでは、G8サミットが世界やアフリカの開発促進に貢献できる現実的な方法を特定し、さらに途上国や開発機関が抱える問題をサミットの準備プロセスに盛り込むために、サミットの目的、計画、展望や可能性について評価を試みた。

■ 第15回ウ・タント記念講演会

7月8日の第15回ウ・タント記念講演で、セネガル共和国大統領のアブドゥライ・ワット氏が、「気候変動とアフリカ主導のイニシアティブ」と題して講演した。大統領は気候変動、特に「緑の壁(the Great Green Wall(英))」などのアフリカ主導のイニシアティブがどのように砂漠化防止に貢献できるかについて述べ、「緑の壁」については、ワッド大統領とともに、緑の壁プロジェクト科学委員会の委員長を務めるアブドレイ・ディア教授が説明を行った。サハラ砂漠以南の国々では、毎年推定150万ヘクタール以上の国土が砂漠化によって失われている。昨年、国連大学国際水・環境・健康ネットワークが作成した報告書では、砂漠化は「現代最大の環境問題」であり、今後10年間だけでも5,000万人の人々が今住んでいる場所から立ち退かなければならない危険がある。と述べている。

■ ジョイント・サスティナビリティ学で連携に合意

「サスティナビリティ」は、「環境の世紀」と呼ばれる21世紀の科学技術、経済システムを語る最重要キーワードの一つ。そして、地球社会を持続可能なものへと導く新しい学際的学問が「サスティナビリティ学」。国連大学は、このほど日本のトップクラスの大学が集まるサイスティナビリティ学連携研究機構(IR3S)と連携し、ジョイント・サスティナビリティ・イニシアティブを立ち上げ、グローバルなサスティナビリティに貢献することに合意した。

具体的には、教授陣、研究者、職員の交流を促進するとともに、共同研究や共同教育プログラム、セミナー、シンポジウム、ならびにサスティナビリティ学促進プロジェクトのための道を開くことを目指す。

国連大学で開催された講演会・シンポジウムは「UNU VIDEO PORTAL」(<http://c3.unu.edu/videoportal/>)で見ることができます。



財団法人 国連大学協力会  
〒150-8925 東京都渋谷区神宮前 5-53-70  
TEL 03-5467-1368 FAX 03-5467-1349  
URL <http://www.jfunu.jp/> E-mail [jf@hq.unu.edu](mailto:jf@hq.unu.edu)

「ねんきん特別便」  
年金記録の確認にご協力ください  
社会保険庁  
<http://www.sia.go.jp/>